

上柳緑編『天龍峽』と 今村良夫編『天龍峽』

鎌倉 貞男

昨年十一月、天龍峽大橋が開通した。令和の天龍峽の新しい姿である。それに先だって、昨年末、飯田市立中央図書館では「天龍峽」の展示コーナーが特設され、関係書籍や写真等が展示された。

その中に標題の二書があったので、目に留められた方もあろう。いずれもかなり昔の本だけに、読み手も希だと思っから、この機に両書の内容を概観してみた。

簡単な言ってしまうと、これら二冊は名勝地天龍峽を訪れた文人や作家の作品集である。それも天龍峽命名以来の来歴者なので、作者も作品数も少なくない。

まず明治四十五年に発行された『天龍峽』(発光堂刊)である。七十余の本

野村素軒、同様の経

歴を持つ華族久我通久(梅菴)や東久世通禧(竹亭)等の書字が続く。揮毫者は、幕末から明治の政治家や頭官である。次いで、天龍峽十勝の写真相添えられる。

編者は例言で、本書の目的は天龍峽の勝を伝えることで、作品の巧拙を問うものではないことを明言している。また、編纂に当たっては、(発刊時、既に故人となっていた)善勝寺住職高松陸舟、旧飯田中学校教師千野鳩林、新聞社社員小林天龍の三氏が尽力したことを記し、その功績を讃えている。

田町長を歴任し、書画・短歌・俳句をよくした文化人である。平洲・紅雲・外川等の号を持つ。表紙の題字は、医師で能書家の永坂石棟である。以下、南画の大家田能村直入の口絵を始めとして、元老院議員や貴族院議員を歴任した野村素軒、同様の経

歴を持つ華族久我通久(梅菴)や東久世通禧(竹亭)等の書字が続く。揮毫者は、幕末から明治の政治家や頭官である。次いで、天龍峽十勝の写真相添えられる。

以下、最も多いのは五言絶句・七言絶句等の漢詩である。

作品の掲載順は、詩が作られた年代順と思われる。漢詩は作者別に記され、川路の郷医関島松泉と十勝の磨崖碑を揮毫した日下部鳴鶴の十勝詩が最初を飾る。集中特に多いのは、十勝名を明記し、それぞれ一詩を賦した十勝詩である。十勝は、誰の作も全て垂筆磯・鳥帽子・姑射橋・帰鷹崖・浴鶴巖・烟々潭・樵庵・仙牀盤・芙蓉峯・龍角峰の順に配列されている。

この十勝詩の作者は、右の二人の他、丁野二南・水谷奥嶺・神波即山等、十余名を数える。一方、十勝にこだわらず詠じた作者も厳谷一六を始め、土方泰山・福田静處・遠山乾齊等、かなり多い。

それらの間、適当な間隔を置いて、天龍峽十勝の挿絵と印譜がそれぞれ一六ずつに掲載されている。挿絵は、「常山」の落款のみで署名も無く、未だ誰の作とも判明しない。印譜は署名や落款は無いが、小田嶋氏の研究から、岡谷の篆刻家八幡郊處の作と知れた。

本書後編は、「天龍峽和歌」と題された天龍峽を詠んだ歌である。冒頭は十勝ごとに各一首ずつ詠んだ萩原巖雄の和歌である。次いで、松波遊山・宮地巖夫・逸見沖三郎等、天龍峽来遊者の歌があり、郷土作家館松千足の長歌へと続く。

その後は、十勝ごとに和歌や俳句が四六作品ずつまとめ載せられている。作者は、教育者で歌人だった有賀盈重・伍和村戸長で実行教

育委員長や公民館長として活躍した歌人・郷土史家。天龍峽の研究や発展に大きく貢献した。

氏は、百三十程のこの本に、十勝に代表される狭義の天龍峽はもちろん、広く同地を中心とした天龍川水系に関わる紀行・随筆・詩歌・伝承を抄出して載せている。また氏は、前書を承けるものと

前書を承けるものとして本書を編み、前

書掲載作品との重複を避けている。

中川紀元の表紙絵をもつこの本には、外国人を含む三十三人の作品が作者別に掲載されている。作品の種類や長短は様々だが、いずれも作者の紹介や出典が添えてある。掲載作家は概ねよく知られた人なので、ここではその説明は省き、掲載順を変えて、それら作者を以下にまとめて紹介する。

まず当然のことながら、本書において天龍峽記(書簡)鳴鶴の作品(書簡)が始めに登場する。(実際にはその前に古歌と市川白猿の旅行日記がある)次いで、登山家のウエス(英文と岡村精一訳文)や小島鳥水

の天龍川紀行の文章が続く。

歌人では、斎藤茂吉・今井邦子・斎藤瀧・尾上柴舟・佐佐木信綱・中原綾子等が選ばれ、載録歌も多い。俳人では、荻原泉水・白田亜浪・松本たかし・富安風生があげられ、それぞれ句が並ぶ。詩人では大和田建樹・白鳥省吾、童話作家では厳谷小波が選ばれ、各人の詩や随筆が載る。

意外に感じるのには、画家や鑄金家による文学作品である。横山大観の画談、川合玉堂の短歌、有島生馬の俳句、正宗得三郎の随筆、香取秀真の短歌がそれぞれある。これらの芸術家は、文学にも造詣が深かったようだ。さらに、前書で多

く見られた漢詩人は影をひそめ、志賀重昂・国分青庄・国府犀東等一三で、作品数も少ない。その他、教育者の新渡戸稲造・矢沢邦彦・小原福治、小説家の葉山嘉樹・久米正雄、倫理学者の和辻哲郎等、なかなか多彩の人々の作品が掲載されている。

こうしてみると、明治以降、大正から昭和前半期にかけて、多数の著名作家が天龍峽を訪れ、多くの作品を遺していることに驚く。

最後に両書の掲載作品や作家を比べてみる。まず作品では、前の書が漢詩・漢文・和歌中心であるのに対して、後の書は口語の散文が多い。また、作家では、

以後、天龍峽に関するこれほど本格的な作品集は発行されていない。紙面の都合上、実際の作品は一作も紹介できなかつたうえに、この種の説明ではわかりにくかろうと思うので、両書の一読をお勧めして本稿を終える。

(物故者敬称略)

【天龍村平岡】



上柳緑編『天龍峽』



今村良夫編『天龍峽』